

## 第 2 回滋賀県総合教育会議

2016 年 6 月 29 日

## 滋賀県立大学のアクティブラーニング科目

滋賀県立大学 教育・学生支援担当理事兼副学長 倉茂好匡

## 1. 全学必修科目

## ① 人間探求学（1 年前期）

学科ごとの授業運営。5~10 人のグループ編成にして、テーマを決めてプレゼンテーションあるいはディスカッションを行う。各グループに 1~2 名の教員を配置。特にユニークなものは、環境科学部環境生態学科の「教育ディベート方式」。

## ② 地域共生論（1 年前期）

2 学部 300 名の学生をホールに集め、5 名ずつの 60 班編成。毎回、1 名の教員がミニレクチャーを行い、ここでレクチャーに関連した「問題」が提示される。学生はグループ討論で「問題」に対する自分たちなりの答えを作る。その後、グループ間でのプレゼンテーション。毎回、4~5 名の教員とラーニングサポーター学生 10 名を配置。

## 2. 学部必修科目（旧来型の実験・実習を除く）

## ① 環境科学部「環境フィールドワークⅠ」（1 年前期）

学部全学生を学科混成の 50 名の 4 グループに再編成。A~D の 4 テーマで、事前学習、フィールドワーク、まとめ、プレゼンテーションを行う。事前学習の段階からグループワークを実施。各テーマに学科混成の 4 名の教員を配置。

## ② 環境科学部「環境フィールドワークⅡ」（2 年前期）

学部全学生を 9 つのテーマのグループに配属。各グループには、学科混成の 5 名の教員を配置。グループ内で設定された課題に対し、フィールドワーク、分析、まとめ、プレゼンテーションおよび報告書作成を行う。一種の PBL。

## ③ 人間文化学部「環琵琶湖文化論実習」（1 年通年）

学部内 5 学科ごとの授業運営。学科内をいくつかのグループに分け、事前準備、フィールドワーク（泊りがけ実習を含む）、まとめ、プレゼンテーション、個人レポートを課す。基礎力養成を交えた PBL 型授業。

## ④ 工学部「技術者倫理」（3 年後期）

学部 3 学科学生（150 名）を大講義室に集め、学科混成の 30 班に編成。毎回、技術者倫理の問われた具体的事例を提示し、その多面性・倫理的問題点をまず個人ワークで指摘する。そののちグループワークで整理するとともに、これに対する解決法を考えさせる。そののちプレゼンテーションをさせ、グループ間の見解の違いを把握し、そのうえで個人で毎回のレポートを作成する。

## 3. 学科必修科目（ユニークなもののみ。旧来型の実験・実習を除く）

## ① 環境科学部環境生態学科「環境生態学基礎演習」（1 年後期）

全 15 回の授業を 1~3 回、4~7 回、8~11 回、12~15 回の 4 タームに分割する。毎回、学科教員が自分の研究紹介を 30 分間行う。そののち、第 1 タームは「ノートテイキング」、第 2 タームは「図表の読解および文章化」、第 3 タームは「結論の導出」、第 4 タームは「要約」を行う。まず個人ワークを行い、次にグループワークでグループごとに答えを出させ、プレゼンテーションする。次に教員がコメントし、改良したものを個人の宿題として次週に提出する。なお、第 1 週だけは「正しい文の書き方」を指導し、「自分の作った料理の作り方」を文章化して提出させている。

なお、科目レベルでアクティブ化しているものは多数あり。詳細は省略。

## 滋賀県立大学 入学者受入れ方針改訂作業について

学校教育法施行規則の一部を改正する省令(平成 28 年度文部科学省令第 16 号)により、すべての大学において、卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー、以下 DP)、教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー、以下 CP)、入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー、以下 AP)を策定し、平成 29 年 4 月 1 日からは公表することが求められている。

滋賀県立大学では、これら 3 つのポリシーのうち、まず AP を定め、そののち DP および CP を策定した。これらのうち、DP および CP については「各学科の教育課程の点検」にも資することができるようにするため、相当に明確なものを策定することができた。ところが、先行して策定された AP については「あいまいな表現」あるいは「入試でどのように判定するかが不明確」な表現になっているものがある。そこで、特にこの短所を補うべく、現在修正作業を続けている。

具体的事例を示す。

X 学部 A 学科の例

### DP

- A. 人間・社会・環境の関係について多様な側面から理解できる。(知識・理解)
- B. 外国語で意思疎通し、与えられた課題について情報を入手し発信する基礎能力を養う。  
(技術・技能)
- C. 生態系の構造と機能と探求するのに必要な科学的基礎力を修得する。(知識・理解)
- D. 様々な生態系の構造と機能、地域の課題について幅広い知識を身につけ、それらについて自然科学(物理学・化学・生物学・地球科学)的方法論を用いて理解できる。(知識・理解)
- E. 生態系の保全と修復に関する知識を身につけるとともに、その保全修復に積極的に関わる態度を持つ。(知識・理解)(興味・関心)(思考・判断)
- F. 物理的・化学的・生物的・地球科学的環境因子の調査測定、解析に必要な技術を修得する。(技術・技能)
- G. 環境問題、地域課題の解決に対し、専門知識に基づいて自らの見解を形跡できる。(知識・理解)(興味・関心)(思考・判断)
- H. 調査結果等を口頭発表、論文作成等の適切な手法を用いて表現できる。(技術・技能)(j 思考・判断)(興味・関心)
- I. 他者と論理的に議論できる。(技術・技能)(思考・判断)(興味・関心)

## CP

- A. 人間・社会・環境の関係について多様な側面から理解できる能力を養うための科目を配置している。
- B. 外国語で意思疎通し、与えられた課題について情報を入手し発信する基礎能力を養うための科目を配置している。
- C. 生態系の構造と機能と探求するのに必要な科学的基礎力を修得するための科目を配置している。
- D. 様々な生態系の構造と機能、地域の課題について幅広い知識を身につけ、それらについて自然科学（物理学・化学・生物学・地球科学）的方法論を用いて理解できる能力を修得するための科目を配置している。
- E. 生態系の保全と修復に関する知識を身につけるとともに、その保全修復に積極的に関わる態度を養うための科目を配置している。
- F. 物理的・化学的・生物的・地球科学的環境因子の調査測定、解析に必要な技術を修得するための科目を配置している。
- G. 環境問題に対し、自らの見解を形成できる能力を養うための科目を配置している。
- H. 調査結果等を口頭発表、論文作成等の適切な手法を用いて表現できる能力を身につけるための科目を配置している。
- I. 他者と論理的に議論できる能力を身につけるための科目を配置している。

## 現行の AP

A 学科は、自然環境の総合的理解と環境中で生じている問題の解決を目指しています。この理念に基づき、琵琶湖とその流域（集水域）の環境を実地に利用した授業が数多くあります。また学生には、自然と人間が複雑に関わりあう環境での問題を発見し、その科学的解決法を提案することを求めます。このため、理科および数学など自然科学についての知識を持つとともに、環境科学を学ぶ上で必要な国語・英語・地理歴史・公民などの基礎学力を持った人、あるいは自分の力で洞察する能力の高い人を求めます。

（注：学科の特徴、授業特性、求める学生像の3つが書かれている。明確な AP とは言い難い）

## AP の改定案（作業中のもの）

### 1. 求める学生像

- ① 自然環境に対する知的的好奇心や探究心を持ち、自ら積極的に学ぶ意欲を有する人（関心・意欲）
- ② 自然科学に関する高度な専門知識と技術を身につけるために必要な基礎学力を有する人（知識・理解）
- ③ 高い洞察力を身につけるために必要な基礎力をもつ人（思考力・判断力）

## 2. 入学者選抜の基本方針

A 学科の選抜試験では、高等学校までの教育課程を尊重し、基礎学力（知識・理解）を重視します。さらに高等学校教育や日常生活によって培われた論理的思考力・判断力あるいは自然科学への関心・意欲と本学科への適応性について評価します。このため、一般選抜試験（前期日程・後期日程）と特別選抜試験を実施し、それぞれ、大学入試センター試験、個別学力試験、個別面接の中から2つを組み合わせる課します。

## 3. 選抜方法

### 【一般選抜試験（前期日程・後期日程）】

一般選抜試験（前期日程・後期日程）では、自然科学に関する知識と論理的思考力・判断力に加えて、環境科学を学ぶ上で必要な基礎学力を重視します。基礎学力を測るために大学入試センター試験を、また自然科学に対する知識と論理的思考力・判断力を測るために個別学力試験を課します。

### 【特別選抜試験（推薦入試）】

特別選抜試験（推薦入試）では、自然科学を学ぶ上で必要な基礎学力および洞察力に加え、自然科学への関心・意欲と本学科への適応性を評価します。基礎学力および洞察力を測るために個別学力試験（英語および総合問題）を、また関心・意欲および適応性を測るために面接試験を課します。

（注：APを「求める学生像」として箇条書きで示す。そのうえで、各項目に沿って選抜するため、基本方針と方法を明示している）